



# 校長室だより

令和5年度

1月19日

NO. 38

## 伝統を感じ、伝統を受け継ぐ 年はじめ

今年の夏休み、「道根往環」を歩きました。「どうする家康」の影響もあり、鳥居強右衛門が家康のもとへ援軍を頼みに、長篠から岡崎まで歩いたといわれた道、「道根往環」があると聞き、仲間の校長先生数人で、まずは東公園からやすらぎ公園までの道のりを、そしてその後、一人でやすらぎ公園から才栗、岩戸の尾根を歩きました。暑い中でしたが、木陰は少しひんやりしていて、(少し雨がぱらついたこともあり)程よい汗をかきました。現在の道がなかった頃には、東三河に抜ける主要道路であったと言い、街道沿いには茶屋があったり、明治時代には日に100頭もの馬が行き来したりしたと、言われています。

15日に行われた「新春かるた取り大会」は秦梨小の伝統行事であります。そこで読まれる「秦梨歌留多」は、まさに秦梨の魅力や歴史の詰まっているものでした。多くの子供たちが、自分の好きな札(推しの札)をもち、読み手が読むと同時に、目当ての札に向かいます。「取れた、取れなかった」で一喜一憂する姿は、きっといつの時代でも同じでしょう。自分も実際に、そのかるたに出てくる「昔の道だよ 尾根道を行く『道根往環』」を歩



いてみたことで、それをとても身近に感じ、様々な札の内容にも興味をもちました。子供も、かるたを楽しむとともに、この「秦梨歌留多」を通して、秦梨の歴史や魅力に出会い、また実際に見たり聞いたり、感じたりすることで、さらに、その秦梨の良さを味わったり受け継いだりすることができるのではないかと思います。

10日に行われた「書き初め大会」も、秦梨に関わらず市内各小学校で、伝統となっています。「書き初め」の起源は平安時代の宮中行事までさかのぼり、江戸時代にはおめでたいお正月(年の始め)に、字を書くという習慣が庶民にも広がったそうです。現在の活字やパソコンが主流の時代の中で、こうして字を書くことが続けられるのは、自分で字を書くことに意味があるからなのでしょう。子供の字は個性的で、書き初めで子供の書く字は、人それぞれです。また、どんなことに気を付けて、どんな気持ちで書いたか、書くごとに字も変わってきます。きっとコンピューターにも、子供と全く同じ字は、書けないでしょう。新年の静寂な雰囲気の中で行われる「書き初め」には、昔の人が「字が上手になるように」とか「今年1年がよい年になるように」など思い書いたその願いが、今にまでつながっているのでしょう。

「伝統とは形を継承することを言わず、その魂を、その精神を継承することを言う」(嘉納治五郎)、「伝統とは先人が築いてきたものを把握し、それをもとに一歩先へ踏み出すことを言う」(井上萬二)という言葉があります。今の、あるいはこれからの変化の激しい時代の中で、一つのをいつまでも残していくことは、大変なことです。その上で、この歴史ある秦梨で、「伝統」を引き継いでいくためには、こうした伝統行事の良さや意味を感じたり考えたりして、その伝統を楽しむことが大事だと考えます。